

# 「軍都」から「商業集積地」へ

——国道16号線と相模原——

○東京都市大学非常勤講師 塚田修一  
日本大学文理学部 後藤美緒  
法政大学大原社会問題研究所 松下優一

## 1. 目的

国道16号線が、米軍基地を結ぶ「軍事道路」としての側面を有していることはよく知られている。それ故に、16号線沿いの基地の街——横須賀・福生・狭山——では、いわゆる「米軍基地文化」が展開した（塚田2014；2017など）。しかし、同様に16号線沿いの基地の街である相模原市——現在もキャンプ座間、相模総合補給廠、相模原住宅地区が所在している——では、米軍基地文化は展開せず、むしろ、1970年代以降、この相模原市の16号線沿いは、ロードサイド店舗が数多く展開する、一大商業地域となっていく。

では、なぜこの基地の街・相模原市では、米軍基地文化が展開することがなかったのか、またなぜ相模原市の16号線沿いが、ロードサイド店舗が集積する一大商業地域へと変容したのか。本報告では、先行研究ではあまり検討されてこなかったこれらの問いを考察する。そしてその作業は、「軍事道路としての国道16号線」を再検討することにも繋がるはずである。

## 2. 方法

上記の考察のため、他の16号線沿いの街々——例えば、狭山／入間や柏——を適宜確認しながら、「市史」や「商業実態調査」をはじめとする言説・史資料による調査（通時的考察）と、相模原市内の16号線沿いを中心としたフィールド調査（共時的考察）の二方向の調査を接続させることで、相模原市と16号線の関係性の戦後史と現在を立体的に把握、描出していく。

## 3. 結果・結論

戦後社会の資本が描く波形の中で、相模原市は二度にわたり、「発見」されている。一度目は「郊外」——すなわち、「住宅地」・「ベッドタウン」——として、二度目はロードサイド店舗の「マーケット」として、である。それ故に、相模原市においては米軍基地文化が展開する余地がなかったのである。また、これらの「発見」に加え、米軍基地以前の、「(旧日本軍の) 軍都」の性格との連続性——例えば、「軍都」時代における、現在の16号線の、「帝都防衛」を目的とした整備など——こそが、相模原市の16号線沿いの商業地域化を導いたことを示す。

## 文献

小田光雄、2017、『〈郊外〉の誕生と死』論創社。

栗田尚弥編著、2011、『米軍基地と神奈川』有隣新書。

相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編、2014、『相模原市史 現代テーマ編』。

塚田修一、2014、「〈基地文化〉とポピュラー音楽——横浜・横須賀をフィールドとして——」『三田社会学』第19号。

——、2017、「1970年代の米軍基地文化に関する一考察——「狭山アメリカ村」を中心に——」『三田社会学』第22号。